

# 春燈

11  
月刊

NOVEMBER 2007



# 久保田万太郎の句

## 迎火やあかあかともる家のうち

『草の丈』昭和十一年作

前年失った妻のために焚く迎火である。人通りの途絶えた道の端でひとり焚く芋殻の火は、作者のこころを映している様に小さく心細い。ふと目を上げると、家の中のあかりが常にも増して明るく見えた。去年まで妻と過ごした部屋、語らいに、諍いに、折々の生活のあとがよみがへって来るのである。残されたものの心情が、あかあかと点る灯から、より切々と伝わって来るのである。

和田 幸江

安住 敦の句

# 湯豆腐やいのちのはてのうすあかり

『流寓抄以後』昭和三十八年

若いときには何でも無かったが、老境に入ってくると、肉体と感性の衰えを痛感しないわけにはいかない。これから幾許もない年月を数えては老と死に対する恐怖感に襲われ、暗澹たる思いに駆られる。こんな時にこの句を吟誦してみると、奇妙なやすらぎに包まれる。湯豆腐とうすあかりが呼応して生きる衰れと愛しさの中に一抹のひかりを投げかけてくれる。

寺村年明

# 西ヶ原日記

(36)

鈴木榮子

削り氷の上<sup>あ</sup>品<sup>て</sup>なるもの一つとよ  
夜の秋ドラマの男優いつか老け  
布草履足指締めて素足なり  
夏風邪の咳して咳の止まらざり  
短歌晶子俳句万太郎選の秋高し

知れば迷路の米軍地下道敗戦以後  
地蔵盆の御供の菓子をはにかみ受く  
滝野川ごぼうと聞いてより親し  
公会堂の舞台の高し後の月  
秋祭思ひ出一足飛びに山車  
山車曳く手片手は祖母に秋祭  
夕方六時もう日が落ちて蛇笏の忌

## 八億四千の念

本多遊方

空を飛ぶ夢より覚めて小鳥来る  
石たたき朝の勤行端折りけり  
ままごとのごとし朝餉や貝割菜  
ドアフォンに何か言ひたげ秋の蝶  
コスモスや迷宮入りのメモありし  
芋虫をころがすだけにとどめけり  
敦の句碑に取手の芒穂をあげて  
熱き茶と冷たき茶でて白露かな  
通夜了へし僧を照らせり初月夜  
長き夜や八億四千の念ありし

## 紅葉且つ散る

岡野イネ子

ひゆうひらと月夜に笛を吹く女  
放蕩の果ての柩にきりぎりす  
待宵や伊達の薄着の藍微塵  
月満ちてノラ猫撫でて行く男  
雨月とて逢はねばならぬ人のあり  
いつしかに虫売り絶えて草の花  
鏡花忌や伊勢の桑名は按摩笛  
なまなかに宵庚申の日待ちの夜  
三味線を置き新走り召せと言ふ  
紅葉且つ散りて山姥消えにけり

# 当 月 集

鈴木 榮子選



○ 佐々木 新

武甲山背に向日葵を闘兵す

鱗雲武甲山無惨に夕映ゆる

高坏にひよろりとのつて走り諸

雑踏に信号待つや秋暑し

抜け露地や白粉花のとほせんぼ

○ 小田切明義

山寺や雲湧くごとく四葩かな

みちのくの山寺に聞く蟬しぐれ

月山の日光黄菅霧晴るる

ご神湯に足遊ばすや夏の果

残鶯の餌を残し尾根に消ゆ

○ 向井芳子

くちなしや少女小説棚に旧る

父逝きし日も斯く白かりきさるすべり

海昏し佐渡の盆唄遠く聴く

名水に練る新蕎麦や丸太椅子

摩尼殿の菩薩を訪へり秋の蝶

○ 内野俊子

夏瘦といふこと知らぬ割烹着

掬ひきし金魚荷となる戻り道

新涼や新刊句集の一頁

駅ふたつほどの上州秋しぐれ

解かれざる女人結界いなびかり

○ 横田初美

連凧は風を優雅に夏ゆかす(凧揚大会)

風の日を蜘蛛まとひて新松子

木椅子乾くプールサイドの九月かな

澄む秋の画布をはみ出す波しづき

子規の忌来日除の棚の深みより



# 春燈の句

鈴木 榮子選

船溜り八朔潮に浮き上り

列島攪乱の罪炎帝にあり

再生の尾の頼りなく蜥蜴消ゆ

彼岸花真昼さみしと群れ咲くや

草の露一カラットのダイヤほど

万策のつきて眠れぬ残暑かな

初舞台待つ間にくはる秋の蚊に

真夜中に鳴くは我が身や秋の蟬

握られし旬の小鰭の色気かな

秋近し路地に聞こゆる厨音

出水あと雑伏す草に花の色

新涼やひと夜の花の名残り紅

切り分くる豆腐ゆれぬる九月かな

となりあふ無縁墓にも盆用意

柵経に息びつたりの親子僧

魂棚に父母の写真を並べけり

新盆や故郷たたふ亡母の詩

初盆や見なれぬ顔も打ちとくる

初盆や面影に立つ若き亡母

草虱たれかれ無しにへばりつき

藤袴うするる記憶たぐりけり

弓張月忍者屋敷の上になかな

新しき表札上げる良夜かな

埼玉 中里よし子

東京 馬場 宏一

千葉 吉村さよ子

兵庫 尾崎 貞

兵庫 秋山 薦

大阪 春日豊枝郎

灯を祀りみちのく短き夏惜しむ

夫婦して入るべき墓を洗ひをり

いささかの確執譲り魂迎

花芙蓉一ト日一途のいのちかな

硝子越しに透明な秋来たりけり

化粧水一滴の手の秋澄めり

噴水を飽かず見てゐるホームレス

夕暮の切絵のやうな糸瓜棚

彫なぞり墓を洗ふ子家継ぐ子

赤々とトマトに名あり桃太郎

青胡桃撓わ一族盆回向

南部風鈴風拾うては鳴りにけり

樽回る競渡に浦の響めけり

廃船の間に憩ふ子ペーロン

防波堤高飛び込みの泳ぎかな

埼玉 鈴木 撫足

神奈川 沼田 桂子

兵庫 和田 絢子

長崎 増田 菖波

# 余言

鈴木 榮子

十六夜や猫の乳もつ三味の皮

春日豊枝郎

春日さんは芸名であろうか、昔から芸名を持つ方も多かった。三味線か唄であろうか。そのお三味線で子供の頃から三味線の皮がしつかり張られている面に、不思議なことにポチンと小さな傷のような淡いかすかな乳色の跡がいくつもあるのがなんとも不思議であった。この度ああそうかと今更のように思った。猫も人間様のお役に立っていることかと彼等の後生を思ったことである。「十六夜や」の上五がなんとも言えぬ効果をあげている。

朝刊の嵩の厚さや秋湿り

范 友佳女

朝一番の仕事は朝刊をポストに取りに行くことだ。新聞記事を話題にしないということも言われるが、世の中は目まぐるしく動いているのだ。どつしりというほどの嵩で朝刊を受取ると広告は「先ず別にする。」

秋湿りとはあの新聞のずっしりとした重さであろう。世の様々を伝える重みを毎朝朝刊で受止めている。(以下略)

掬ひきし金魚荷となる戻り道

内野 俊子

金魚掬いの楽しさは子供のころみな経験がある。子供のころはよい。さて大人になって仲間と遊びで金魚掬ひに興じたことがあった。そのあと食事、喫茶、句会と連れて歩くの閉口したことがあった。金魚は可愛いがこの句の通り荷となってしまつて、喫茶店へ上げたのか、どうか、今は覚えていない思い出である。